種の論理再考

（数理思想史の観点から）

林晋　京都大学大学院文学研究科

講演の目的

この講演の主目的は「19-20 世紀思想史の新パースペクティブにもとづいて田辺哲学を見直すことの提案」である。見直し対象の中心は種の論理であり、見直された後の種の論理は社会哲学であると同時に数理や自然科学をも射程に入れる形而上学の存在論部分として理解される。そして、この理解により「田辺哲学初期の新カント派の色が濃い科学哲学は弁証法研究の結果放棄されたのではなく、種の論理を通して大きな転換を遂げ晩年まで脈々と生き続けた」ということが明らかになる。さらにこれにより、種の論理以後顕著となり晩年まで続く「数学に関係のない著作にデーデキント切断などの数学用語が現れる」という田辺の議論の方法の「合理的理由」も明らかになる。つまり、田辺が作り上げた形而上学・世界観に合意するかどうかは別として、非合理に見え哲学全般における数学への言及が、第二次世界大戦前までの西欧思想史の文脈からは自然でアカデミズムの主流に位置するものであったことが明らかになる。

これらの事実は、この 10 年ほどの間に科学哲学史やドイツ思想史の分野において研究が進みつつある「19-20 世紀思想史の新パースペクティブ研究」の主張を、田辺哲学が鏡のように映し出していることを意味している。これを逆にみれば、この新パーステクティブのような世界思想史の視点なしには、田辺哲学の真の姿は明らかにならないということである。少なくともそのような視点により田辺哲学のより明確な姿が見えてくるのである。

種の論理とは何か？ - 世界思想史の新パースペクティブから

私が「新パースペクティブ研究」と呼んでいるものは、今世紀に入って英語圏ドイツ語圏において盛んになってきた、英米系哲学と大陸哲学[1]の共通のルーツと、その分断のプロセスを探る思想史研究のことである(e.g., [1] [2] [3] [4])。これらの思想史研究は幾つかの異なった背景から行なわれているが、共通するのは、新カント派を大陸哲学、分析哲学の共通のルーツとみなし、新カント派の時代から、生の哲学、現象学などを経てハイデガーを中心とする大陸哲学と

---

[1] 英米系分析哲学、大陸哲学という用語は、とくに大陸哲学に対しては一種の蔑視を含んだ用語であろうが、他に適当な用語がないので使用する。ここではそれらの傾向を区別するためにのみ使用していることを断っておきたい。

ウィーン学団を中心とする分析哲学にドイツ語圏の哲学が分断され、それが 20 世紀哲学の二大潮流となったとする見方である。

この観点に立てば、田辺元は、まさにその分断が起ころうとしていたときに、その哲学を構築した人となる。しかも、彼は初期においては英米哲学への道の基礎となった数学基礎論の日本への紹介者として重要な働きをし、学位もその数理哲学により得た。後期・晩年にはもう一方の道の旗手であり彼の直接の知人でもあったハイデガーの哲学の重要性を逸早く認め日本に紹介し、さらには、それと建設的に対峙しようとした人である。つまり、田辺はこの分断の歴史の時代に生きただけでなく、その分断の歴史を生きた人なのである。

しかし、田辺自身は自らが「分断の歴史を生きた」という、この解釈を厳しく否定するはずである。なぜなら種の論理とは、この起こりつつあった分断に抗し、二つの道を統合する絶対弁証法的形而上学の存在論的論理学部分に他ならないからである。

M.フリードマンの「二つの道への分断」論と田辺哲学

新カント派のドイツ思想史における重要性が忘れられているという問題はシュネーデバッハ [5]などにより指摘されてはいたものの、田辺が抗しようとした「二つの道への分断」の歴史を、生き生きと描き出し、新カント派への関心を最も掻きたてのは、米国の哲学者 M.フリードマンの著作 A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger [1]であったろう。

この著書でフリードマンは、カッシーラーとハイデガーというドイツ哲学の旧新の雄が対決したとされる「ダボス討論」に、もう一人の若き無名の出席者が絡んでいたことを指摘した。後に形而上学批判論文 [2]でハイデガー哲学の無意味性(Unsinn)を、分析哲学的手法で論じ分析哲学の方向性を明瞭に示すことになるＬ．カルナップである。フリードマンは、この三人の直接的個人的交流を描き出すことにより、三者が互いに有意義に議論できる共通の哲学的言語を持っていたこと、そして、その共通の言語がカッシーラーに象徴される新カント派の哲学であったことを指摘したのである。

この歴史理解は、ローティの分析哲学批判などと同系統のもので、互いの言葉さえ理解できなくなっている大陸哲学と分析哲学の状況を不健全とし、その分断直前の状況を見せることにより、その共通のルーツを通して両者に何等かの通路を作ろうという意図を持つ。

しかし、フリードマンの議論は哲学というより歴史学的な色彩が濃く、この二つの道をどのような通路で結ぶのかというような直接的提案はなされていないし、約 10 年前のフリードマンの著書を受けて行なわれているその後の研究に

---

[2] Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache (1931)

おいても、具体的な「通路」の提案はなされておらず、主に思想史的な研究が継続されているように見える。

ところが、田辺は、この二つの道の間の通路を、それが分断される前から営々と作り続けていたといえるのである。もっと正確に言えば、二つの異なった道を歩む人たちが関心をもつ二種類の問題は、分離して理解されるべきではなく、その真の理解のためには、両者一体となって理解されなくてはならないとするのが田辺哲学の核心的特徴なのである。具体的に言えば、「現存在・実存」についての大陸哲学の問いと、「数学・自然科学」のような分析哲学の問いは、同時に理解されなくてはならない、そうでない限り、どちらの問いも真の理解に到達することはない、そう考えるのが田辺哲学なのである。

この田辺哲学の性格を的確に捉えた二人の京都学派の哲学者がいた。一人は西谷啓治である。西谷は田辺追悼講演において、田辺晩年の数理哲学書「数理の歴史主義展開」（1954）を、「私の感じでは、先生の思想を、一番良くと言ってよいかどうかは分かりませんが、すくなくとも論理の側面では非常にはっきり打ち出しているものではないかと思います」と評した。これは科学そのものに克服すべきニヒリズムの徴候を見出した思想家による、田辺哲学に占める数理哲学的側面の重要性の指摘である。

そして、もう一人は、その科学の側に立った哲学者下村寅太郎である。下村は田辺全集 12 巻の解説で戦後の後期科学哲学を「科学即哲学、哲学即科学としての科学哲学」であったとし、それ故に「科学者の側からの理解や共感が甚だ困難となった」と書いた。そして、西谷が、それこそが田辺哲学の論理を現すものとした「数理の歴史主義展開」こそ、この「科学即哲学、哲学即科学としての科学哲学」を代表する著作だったのである。下村は、この田辺後期科学哲学の性格から「一般に、先生の熱意と期待に拘わらず、反響がなく、先生をして学界からの黙殺を印象せしめ、失望と孤独の感をいだかしめるに到った」とし、そういう学界からの反応に対し「実際に、数学や物理学の原理の論究の真直中に突如として死復活、無即愛、伝統保持即革新建設等の概念が現出するのであるから、田辺哲学の動機や弁証法的思考法や用語に慣れない読者、殊に科学者には、荒唐、唐突にすぎ、理解の通路や手掛りが見出せないのは自然である」と書いたのである。

西谷、下村のどちらの発言も、第二次世界大戦後のものである。特に、下村の発言は、ユダヤ系が多かった論理実証主義者たちが米国に移動しフリードマンの言う「分断」が地理的にも完成してしまった後でさえ、その分断に抗し続けていた老哲学者が置かれた状況を良く伝える文章である。

「分断」が実質的に続く現在、この状況は、基本的には変わっていない。フランス現代思想などには、外見的には田辺の議論に類似する、ゲーデルを振り

回す「科学論」が見受けられるが、そのような議論を受け入れる科学者は例外中の例外であり、通例、異端として排除される。田辺哲学が長い間無視され続けていた理由のひとつを、そこに見出すことは不自然ではないだろう。

しかし、フリードマンが提唱するような「分断の歴史理解」の作業を通せば、少なくとも、田辺がなぜそう考えたか、そう考えざるを得なかったか、ということは理解できるようになるのであり、特に「分断」の完成前に誕生した種の論理における田辺の思考法に歴史文脈上の合理性を見出すことは可能である。そして、それは田辺哲学をたとえば分析哲学の道を歩む人から見て理解可能なものにするだけでなく、フリードマンが期待するような「二つの道の融合」への道の第一歩を開くものであるかもしれないのである。以下、そのような「新パースペクティブ」を意識した種の論理再解釈の試みを紹介する。

種の論理の誕生－人間学と「批判実在論」

種の論理は何故そして如何に生まれたか、この問題は思想史の立場からは興味を引く問題である。その実践的動機については、「種の論理の弁証法」にある、国家主義やマルクス主義が大きな力を得つつあった当時の政治的・社会的状況の哲学的な克服という田辺の説明をそのまま信じるだけで十分だろう。

しかし、これは田辺が社会哲学を考えた動機であり、その社会哲学に類種個の古典的論理学が応用され、「種の論理の意味を明らかにす」で総括された形の論理構造が生まれたかという問いの説明にはならない。つまり、社会存在の論理に、なぜ、そこまでの論理的構造が必要なのか、また、どのように種を中心とした論理が生まれたかということの説明にはならないのである。

この問題に十分な解答はいまだに得られていないし、おそらく、これで十分と言えるようになるには、10 年では足りないだろう。しかし、最近の研究で今まで知られていなかった重要な部分的解答がいくつか見出されつつある。

その一つが種の論理の成立において哲学的人間学・批判実在論が果たした役割であり、また、もう一つが数学基礎論の果たした役割である。この二つともが「新パースペクティブ」の妥当性を補強するものである。そして、また、その観点に立つことにより、これらの歴史イベントの意味が明瞭になるのである。数学基礎論については、次の節で論じることにし、この節では、まず人間学・批判実在論について論じよう。

種の論理成立における哲学的人間学や心身論の役割は、服部 [6]の指摘があり、また現在、竹花 [7]が詳しい研究を行っている。しかし、種の論理を論じるとき、比較的注目されることが少なかった論点である。それに私が注目するようになったのは田辺が残した手書き史料の研究と竹花の研究を通してであった。

種の論理は昭和 9 年(1934)の特殊講義「認識の形而上学」における思索を通して、その具体的形を現したが、群馬大田辺文庫には、この講義の「下書き」が残されている。そして、この講義を記録した、著者不明のガリ版刷りの講義録が藤田正勝氏によって所蔵されている。私は共同研究者たちとともに講義下書きを翻刻・解読し、種の論理の成立過程を探る研究を進めており、現在、53 枚ある原稿用紙の最初の 3 枚分の翻刻と解釈が一応終った段階だが、その段階でもわかる重要な事実がいくつかある。それについて報告しよう。

この講義の題名「認識の形而上学」は、ハイデガーとともに次のドイツ思想界を荷うと考えられ、実際、マールブルグ大学などの教授職獲得では常にハイデガーが後塵を拝することになったN.ハルトマンの主著の題名である。ハルトマン哲学の特徴は、新カント派が物自体を忌避したのに対して、認識論のためには形而上学が必要だとして実在論的立場にたったことにある [5]。

新カント派の中で、実在論に立った人として知られるのは、田辺がその処女論文「措定判断に就いて」でその思想を論じた A.リールであり、その思想が批判的実在論の名で知られているのだが、田辺は昭和 9 年の講義では、リールではなく、ハルトマン、そして、それ以上にM. シェーラーを批判実在論の代表者として議論している。田辺のハルトマン哲学への評価は冷淡だが、それに反して、田辺はシェーラーを「弁証法がない」と批判しつつも、その知識社会学を高く評価した。田辺は、カント目的論の研究から弁証法にいたる際に、シェーラーの実質倫理学を基礎としたと「ヘーゲル哲学と弁証法」の序で書いている。この時期、シェーラーの哲学は田辺に倫理学の方向から相当に大きな影響力をもったようである。

そして、種の論理の社会哲学では、個と種の関係性に、シェーラーの知識社会学の理論がヒントを与えた可能性が高い。この講義メモの冒頭 3 枚目には、すでに類、種、個の用語を使ってシェーラーの知識社会学的な認識論についての議論が行なわれている。

これはまだ見つかったばかりであり、その意味は十分には分かっていないが、同時期の日記により明瞭に実証されているシェーラー知識社会学と種の論理の関係もある。種の論理の第一論文「社会存在の論理」では、原始的な社会への個の帰属関係として、レヴィ・ブリュールの分有の論理が採用されている。田辺は、これを共同体的社会と個の関係として考え、個が種の一部として緊密に結ばれているという意味で種の論理の第一の条件としたのであるが、分有はフランス語の原語では participation であり、シェーラー人間学の重要概念である teilhaben と同じ意味をもつ。少なくとも田辺は、そのように理解したことが、この年の日記にブリュールの participation とシェーラーの teilhaben が同じ意味だという明瞭なメモがあることからわかるのである。

シェーラーの社会学は知識社会学であるから認識論については論じることができても、国家、社会と個人の関係を直接に論じることはできない。しかし、シェーラーの図式を、知識、思考に限定せず、人間あるいは Dasein そのものに用いれば分有関係で結ばれる種と個が生まれるのである。そして、実際に、それを原始社会という「社会のレベル」で語っていたのがブリュールの文化人類学（人間学）であったわけである。

シェーラーv.s.ハイデガー

シェーラー哲学が田辺哲学に与えた影響は、その弁証法受容の時代に遡って考える必要がある。また、田辺の日記には、類種個の三つがなす三位一体、あるいは、three-oneness の図と看做せるものが数多く描かれているが、その三つ円の一つは倫理や道徳を表している図がある。これらや昭和 5 年の特殊講義「心身関係論」の分析により、シェーラー哲学の田辺哲学への影響は明らかになっていくものと期待できる。

しかし、現在でも出版された田辺の論文からわかる重要な事実がある。それは、田辺の人間学の主論文「人間学の立場」におけるシェーラー哲学とハイデガー哲学の対比が、フリードマンの言う英米系哲学と大陸哲学の対比を連想させるものであるということである。

田辺は彼がハイデガーの哲学を日本に始めて紹介しとされる論文「現象学に於ける新しき転向　ハイデッガーの生の現象学」（1924 年大正 13 年）で、新カント派を学の哲学に徹するあまり、「痛ましき現実に面して悩み苦しむ当代の人間には余りに峻厳にして親しみにくい」と批判した。そして、その結果、「時代の傾向は生そのものの真相を具体的に理解し、その中から生ける力を掴み取らんとする方に向った。今日流行の標語となって居る所謂『生の哲学』は実に此傾向の産物に外ならない」とした。このころの田辺は、この論文に限らず、生の哲学と学の哲学の対立について語ることが多い。この時代は第一次世界大戦の終結後の社会的大混乱の中で、ドイツ思想界を風靡した学の哲学である新カント派が瞬く間に消え去る時代なのである。

そして、それに変わるものとして期待されたのが、学の体系・方法論を持ちながら生について語れるフッサールの現象学であり、また、ハルトマンやシェーラーの哲学だったのである。しかし、その現象学から、さらに直接的に生について語れる可能性もつハイデガーの哲学が生まれようとしていると日本に向けて報告したのが、この「ハイデガーの生の現象学」だった。そして、数年後、「存在と時間」によりハイデガーは時代の寵児となる。

そのハイデガー哲学を、7 年後の昭和 6 年、田辺は人間学の文脈でシェーラーと比較し、次のように評した（「人間学の立場」より）：

人間の存在論は存在者(Sosein)の存在論ではありえない。人間はそのあり方を離れて存在者としての本質を規定することはできない。「人間の存在論は存在者の存在論であるに先立って、或いは少なくともそれと同時に、存在（Dasein）の存在論でなければならない。しかのみならず、存在の認識も人間の作用として其自身人間の在り方に外ならないとすれば、人間の存在論は存在の自覚たることを第一条件とする。このような観点からして、本質観照の形相的現象学の立場に於て人間の本質を、対象化せられざる作用中心としての人格性と規定したシェーラーの人間学が、其示唆的なる思想の豊富にも拘わらず、立場として不十分なることを免れないのは当然である。是に対してハイデッガーが全体人間の在り方の自覚として自覚存在的存在論 existenziale Ontologie を、人間学の予想として提唱したのは正当といはなればならぬ。人間学は全体人間としての人間の認識といふ其課題の必然的なる帰結として、自覚存在的存在論（以下之を略して自覚存在論といふ）の方法を其方法とするのでなければならぬと考へられる。

ここまでならば、一方的にハイデガー側に立っているかのように見える。しかし、その後の議論で、田辺はハイデガー哲学の問題点を指摘し、シェーラー哲学を称揚する。

兎に角ハイデッガーの自覚存在論が超個人的全体に於ける人間の共同存在を解釈する途を有しないことは、その立場の制限を示すものであって、人間学が直ちに其立場で立せられることの不可能なるを証示するものといはなければならぬ。而して其卓越せる時間の分析も、専ら未来に於ける可能性の自由計画を契機として行なわれるが為に、過去の被限定性と未来の自由性との相互転換の岐機にして同時に媒介たる現在の永遠性を認めない結果、時間性から歴史性へ進む途を欠き、且（かつ）この現在の永遠的超時間的契機を媒介として各個人の主観的なる時間形成が、客観的なる相互関係に統一せられる可能性を了解することが出来ない。斯くして歴史的時間の確立は不可能に終って居る。斯様な立場に於いては所謂超越も個人的存在の内部に於ける観念論的超越に止まり、実存的超越に達する能はざるは当然の事であろう。シェーラーの人間学の重要なる観点を形造る所謂「宇宙に於ける人間の位置」の自覚の如きは、到底自覚存在論の能くし得る所ではない。自覚存在論は弁証法的人間学の抽象的契機たるに止まる。人間学は全体人間の自己に対する在り方の自覚であるが、人間の在り方は同時に絶対的存在者に対する相対的存在者としての自己の弁証法的位置、他の相対的存在者との共同存在、の自覚の相互媒介を通じてでなければ自覚せられない。人間の在り方は自覚存在たることを特色とするが、それは同時に永遠の絶対者に於ける存在、歴史的社会的共同体に於ける存在、であることの自覚を必然の契機とする。我の存在の自覚は、絶対者に於いて之を媒介とする汝との共同存在を成すといふ自覚に於て始めて成立するのである。

この二つの議論は、学と生の対立の問題ではないことに注意して欲しい。田辺は生の哲学を評して、思いつきに終始して学問体系がない、哲学ではなく文学に行くものであるとローティを連想させる議論をしているが、ハイデガーは「文学」とは批判されていないのである。ハイデガーがシェーラーに対比して批判されている点は一点のみ、その対象とする「存在」の範囲である。田辺はハイデガーがあくまで公共圏というレベルでの超越的存在しか意識に入れないことを批判しているのである。つまり、Dasein の集団ばかりであり、津波や地震のような物理的力に比すべき、国家権力とか、そういう非人間的ながら、ひとりひとりの Dasein に有無を言わせぬ力を行使する存在が視野に入っていない、田辺のハイデガー批判はそこにある。そして、田辺人間学の直接の切掛けの一つであった彼の病から言えば、自分が所有しているはずの自分の肉体さえ、我という Dasein の思うに任せない力を行使してくる超越的存在とさえいえるだろう。我々の肉体は超越としての自然への窓なのである。

この様な観点は種の論理の思想の中に色濃く見出せるものであり、田辺は、それを「世界」と呼んだ。一般相対性理論を意識してのことだろうが、種の論理において、それが時間図式から世界図式への移行によるより高いレベルの存在論であるとされ、それが種の論理、やがては親鸞の思想に辿り着く道となる。つまり、我と汝の関係の世界に埋没することを止め、自らの肉体を窓にして、それらの一切を軽々と越えてしまう自然に開け放たれた世界にハイデガー哲学さえも持つ新カント派的な性格から哲学を開放すること、それが、田辺が種の論で目指したことだといえる。

上に引用したテキストでは、それが人間学であるゆえか、まだ、その「世界」の概念が視野に入っていない。しかし、「**超個人的全体に於ける人間の共同存在**」「**絶対的存在者に対する相対的存在者としての自己の弁証法的位置**」「**同時に永遠の絶対者に於ける存在、歴史的社会的共同体に於ける存在**」などの表現は、後の種の論理における「自然」「世界」としての種を連想させるものであり、そして、それが「**シェーラーの人間学の重要なる観点を形造る所謂「宇宙に於ける人間の位置」の自覚**」に結び付けられているのである。

これは transzendent としての「自然」、ハイデガーの時間にさらに「空間的広がりの次元」を加えた「世界」の視点を開くものであり、種の論理の論文と看做されることもある「図式「時間」から図式「世界」へ」(1932)で田辺が明瞭に打ち出すこととなる思想の萌芽と理解できる。

そして、この「世界」を導入するために田辺が付け加えた「次元」は、フリードマンの分断論に従えば、Dasein たちの空間を逆に「語りえぬもの」として切り捨て「自然」のみを残す論理実証主義が語っていた「存在」なのであり、田辺の意味での批判存在論の「存在」なのである。

実際、批判実在論の創始者とも言えるリールの哲学が、ウィーン学団総帥のシュリックの哲学を用意していたと主張する哲学者もいる（［2］Nordmann 論文参照）。つまり、この主張に従えばウィーン学団シュリックの哲学とは「批判実在論」なのであり、田辺は図式時間から図式世界へと進むために、「分断」の一方の道である分析哲学をその横糸として、そして、もう一方の道であるハイデガー哲学の「時間」という縦糸に織り込んだことになるのである。

ただし、この説明は「分断」を田辺が一枚の布として編み上げていたというイメージを伝えるために過度に単純化されている点がある。それがハイデガー時間論の問題性「**専ら未来に於ける可能性の自由計画を契機として行なわれるが為に、過去の被限定性と未来の自由性との相互転換の岐機にして同時に媒介たる現在の永遠性を認めない結果、時間性から歴史性へ進む途を欠き、且（かつ）この現在の永遠的超時間的契機を媒介として各個人の主観的なる時間形成が、客観的なる相互関係に統一せられる可能性を了解することが出来ない。**」という、過去と未来の弁証法的関係の欠如の問題である。

田辺は、後に、この問題を種の論理の核心部分に置くようになるが、その時、田辺は、それを数学の実数論の概念であるデーデキント切断に託して語った。つまり、導入部で指摘した一般哲学の問題に突然、数学の問題がでてくるという議論のスタイルである。もちろん、フリードマンの分断を一枚の布に織り上げる田辺にしてみれば、数学即哲学、哲学即数学なのであるから、その様な議論は自然なものであったろう。そして、それは弁証法研究以前の田辺が依拠していたことで知られる、新カント派マールブルグ学派H. コーヘンの微分の哲学に見られる特徴なのである。

数理と種の論理

この節では、昨年、「日本哲学史研究」に発表した私の論文 [8]の内容を紹介する。ただし、この論文は、多分に文献学的であり、ここで再現することは難しい。詳細はそちらを読んでいただくことして、ここでは、田辺が種の論理において、前節のハイデガー時間論批判を利用して、いかに数理哲学を社会哲学に相即的に転換したかということを指摘し、田辺哲学においては「分断」の二つの道が融合的に編み上げられるだけでなく、互いが互いを媒介し哲学を進めるものでさえあったことを指摘する。

昭和 9 年の「社会存在の論理」で誕生した種の論理学が実質的に完成をみるのは昭和 12 年の「種の論理の意味を明にす」だといわれている。そして、その間に、種の論理は、高橋里美などの批判を受け、また、田辺自身の体系性の追及により改善されていったが、その中で最も本質的な改変が、「種の自己疎外」の導入による絶対媒介の論理の確立」であった。

田辺の弁によれば、これは、社会存在の論理として実践面を重視して導入した種の論理を、彼がすでに確立していた絶対弁証法という大域的な哲学原理の中に置いたときに生じる矛盾を理論的に解消するためのものであった。絶対弁証法はシステムとしての「世界」の内部に存在するものたちの総合作用関係を規定するもので、たとえば物理学でいえば作用反作用の原理のようなものである。この原理は二つの存在があれば、それが互いに同じ大きさの反対向きの力を及ぼすという原理であり、その存在が何であるかについては全く語らない。つまり、存在論がないのである。種の論理は、そのような一般力学原理である絶対弁証法のもとで、世界にはどのようなものがあり、そして、それらは一般力学原理のもとで互いにいかに作用しあうかということを規定する存在論であった。

ところが田辺が最初提示した存在論を、一般原理である絶対弁証法に照らし合わせたとき、中心概念である種が何者にも媒介されないという矛盾が生じた。なぜこれが矛盾かというと、絶対弁証法の「絶対」の意味する条件の一つが「すべてのものは否定的に媒介される」という条件だったからである。それの結果、田辺は種を個により媒介されるものとして規定する。正確に言えば種は自己を再帰的に否定し、個がその否定作用を触媒的に媒介することになる。

この論理構造の改変は「論理の社会存在論的構造」(1936)でその完成形が報告されたのであるが、そのとき田辺は、この改変が導かれる過程で「終始背景にあって私を導いたのは数学に於ける連続の問題であった」と書いたのである。この改変は、種の論理の論理構造についての改変としては最大のものである。しかし、種の論理は、社会存在の論理であり、それに数理についての思索が使われたとはどういう意味なのであろうか。

このような越境を行なう態度を田辺はプラトニズムとして説明し、また、ウィーン学団ノイラートの統一科学運動さえをも引用して自己弁護しているが、田辺の論点は社会科学であろうと自然科学であろうと、同じ原理で説明できなければ哲学として十分ではないということであった。つまり、分断された二つの道の融合どころか、万物が照応すべきだというのである。この思想の現実的妥当性についてはもちろん問題があるが、絶対弁証法という田辺哲学の前提からすれば、これは自然な考えであったのかもしれない。また、プラトニズムがマールブルグ学派の重要な指導原理であったことも忘れるべきではないだろう。

いずれにせよ、このような考えのもと、この時、田辺が用いていた数理の思想、つまり、それにより社会哲学を導いていた思想は、数学基礎論直観主義のおけるブラウワー実数論なのである。しかしこの理論は、 [8]で指摘したように、その構造上の特性から、個が種(国家)に働きかけてそれを変えることができるという、田辺が妥協することができない条件を満たすことが出来なかったのである。この状況で、田辺は極めて特異な「コペルニクス的転換」を行なう。

田辺は、ブラウワーの理論を捨て、初期科学哲学では、より古典的と看做していたデーデキントの切断論に弁証法的構造を見出すことにより、ブラウワーの実数をデーデキント切断、しかし、本来のそれではなく、田辺が弁証法的に再解釈したデーデキント切断に置き換えてしまうのである。

そして、この置き換えの大きな動機は、デーデキント切断の内部構造が、前節の人間学におけるハイデガー時間論における「過去の無視」を乗り越えることができる未来と過去の「対関係」に形態的に似ていることにあったと思われる。デーデキント切断は無理数を理解するために、それより大きな有理数の集合（未来）と、それより小さな有理数の集合（過去）の対を利用するのである。

つまり、ここにおいてフリードマン的分断の一方としての、ハイデガー的時間を弁証法的に強化した時間概念としてのデーデキント切断の概念が田辺哲学の中に登場するのである。つまり、ここではハイデガー的なものの中に分析哲学的なものが入り込んでいる。あるいは、分析哲学的なものがハイデガー的なもので解釈されているのである。そして、それを使うことにより、田辺は初期の種の論理と絶対弁証法の矛盾を解消したのである。つまり、フリードマン的視点に立てば、田辺は分断の二つの道の片方（ハイデガー）を、もう片方（デーデキント切断）で相即的に理解することにより、彼の種の論理のアポリアを解消し、後には、弁証法的に改変されてしまったデーデキント切断が、彼の弁証法の象徴にさえなっていくのであり、その事が、下村が指摘した科学者からの反発の大きな原因になるのである。しかし、その根源を突き詰めてみれば、この変化は、田辺にとっては彼の哲学上、大きな転換点であったはずなのである。ただし、そのとき、彼の哲学はフリードマンがいう二つの道の統合を達成するものの、片方の道、つまり、科学の道は現実世界の科学の道ではなく、彼が理想とする、この世には存在しない科学、つまり、西谷的に言えばニヒリズムと無縁の「科学」のことであったのである。

講演のもう一つの目的－田辺研究のための文献学的手法

この講演の主目的は、最初書いたように、今まで紹介してきた「新パースペクティブ」に基づく世界思想史のコンテキストにおける田辺哲学の理解の仕方を示すことであった。しかし、「主目的」と書いたように、この講演には、もう一つの目的がある。それはシェーラー哲学やブラウワー連続体論の種の論理への直接的影響を発見し実証するときに使われたような文献学的方法を紹介することである。この方法が田辺研究の推進の一助となることを期待して、これを以下に紹介する。

田辺は研究を行うとき、それに関連した大量の関連書籍を集め、そして、それを丁寧に読み込んだ。「読み込んだ」と見てきたようなことを私が書く理由は、京都大学・群馬大学の両田辺文庫の貴重書に残されている膨大かつ極めて

几帳面な書き込みと、それに基づいて書かれ出版された著作の見事な対応関係を、調査・研究を通して知っているからである。

田辺は他の哲学者の議論について語る場合丁寧にその参照元を記述することが多かった。少なくとも種の論理の時代では、この原則が守られている。京大・群馬大に残る、その引用元の書籍には大半の場合、丁寧に下線が引かれ、コメントが書き込まれている。そして、それは多くの場合出版された田辺の記述に見事に対応しているのである。

田辺は線を引き、書き込みながら、読み考えたのである。そして、さらにはそれを消化し講義する際には、消化の過程における格闘の様子が、講義メモや日記に書き残されている。つまり、我々は田辺の思考過程を彼が残した遺稿から知ることができるのであり、それは往々にして出版されたものより遥かに多くの情報を含んでいる。それにより、この講演で紹介した二例のように、従来は見落とされていた田辺哲学の内容が理解できるようになるのである[3]。

しかし、田辺の崩し字は彼独特のものであり、最近まで容易に読むことができなかった。印刷されていても容易には理解できないものが特異な筆つきで書かれていては仕方がないことであった。しかし、現在、私と私の共同研究者たちは、ドイツ数学思想史研究のために私の研究室で開発した歴史文献研究用ツール SMART-GS を使って田辺の講義メモなどの読解を進めており、これにより従来読めなかった史料が読めるようになりつつある。

我々は、既に、京大文学部が所有する西田の手書原稿のすべてと、群馬大学が所有する田辺の特殊講義の講義メモのうち、昭和 5 年から種の論理の成立の時期のものと思われるものすべて、そして、その時代の日記などの高精度電子画像化を完了している。これらは、日本思想史の研究者には、原則すべてを提供することを計画しており、それらの画像を研究に利用するためのSMART-GS、および、「協同翻刻」という有効で特殊な使用方法[4]、とあわせて、ＷＥＢアーカイブを通して公開・配布する予定である。アーカイブの開設は夏ごろを目処

---

[3] そして、一旦、このような研究から、田辺の著作に埋め込まれた思想が理解でき始めると、著作だけからも、それまでは見落としていた、それが読めるようになるのである。これは不思議なことであるが、戸坂潤が指摘した、あまりに根拠の議論が徹底しているため、議論過剰で逆に論述が平坦になってしまう、という田辺のテキストの特性のためではないかと思う。

[4]京大文学研究科日本現代史永井研究室で考案され、林研究室で改善を加えた方法。グループで翻刻することにより、従来の手書き史料研究では想像もできなかった、速度・精度・容易さで史料解読が可能となっている。

にしている。興味を持たれた方は、kyotogakuhainfo@shayashi.jpにメールアドエス、氏名、所属を一報いただければアーカイブ開設の際にご連絡する。

終わりに

西田が田辺哲学にとって特別に意味を持つことは、その科学哲学の時代から明らかである。しかし、それはあくまで触媒の役割しか果たしておらず、西田哲学が成立したために田辺哲学が成立したのではないはずである。構想壮大な、その後の哲学の歴史からすれば、壮大すぎたともいえる田辺哲学の意図を理解するには、世界思想史の文脈においてそれを理解することが必要なのではないだろうか。本講演で紹介した研究を、私はその様な想で進めている。

前節で紹介したＩＴ技術により、今我々は田辺を読み解くための大きな武器として田辺が残した膨大な史料を使うことが出来る。また、世界思想史の文脈の側からは、新カント派や、新カント派からハイデガーにいたる経路の哲学者達の理解が必要であり、最近まで、その研究があまりに手薄であったために、このような形での田辺研究を行うことの大きな障害になっていた。しかし幸いなことに、今は段々とこの世界思想史側の研究が進み始めている時代である。今こそ、西田哲学とともに日本が生み出した独自の哲学思想体系、田辺哲学の解明を進めるときなのではないだろうか。

引用文献

1. **Friedman, Michael.** *A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger.* s.l.：Open Court Pub Co,, 2000.
2. **Friedman, Michael and Nordmann, Alfred eds.** *The Kantina Legacy in Nineteenth-Century Science.* s.l.：The MIT Press, 2006.
3. **Pulkkinen, Jarmo.** *Thought and Logic -The Debates Between German-speaking Philosophers And Symbolic Logicians at the Turn of the 20th Century.* s.l.：Peter Lang Publishing, 2005. p. 344. European Studies in the Hisstory of Science and Idea, Bd. 12 [Paperback]. 978-3631538661.
4. **Makkreel, Rudolf and Luft, Sebastian.** *Neo-Kantianism in Contemporary Philosophy.* s.l.：Indiana University Press, 2010. p. 331. 9780253221445.
5. **シュネーデルバッハ, ヘルベルト.** *ドイツ哲学史 1831 - 1933、（原著 Philosophie in Deutschland 1831-1933）.* s.l.：法政大学出版局, 2009, 原著 1983.
6. **服部, 健二.** *西田哲学と左派の人たち.* s.l.：こぶし書房, 2000.

7. *超越と身体—田辺元の「人間学的哲学」の構想—.* **竹花洋介.** s.l.： 大谷学会（大谷大学）, 2010, 哲学会「哲学論集」, Vol. 57, pp. 20-38.
8. **林晋.** *「数理哲学」としての種の論理-田辺哲学テキスト生成研究の試み(1).*